

[illegible]

古山後進子書

[illegible][illegible]

長安道中
二月一日

[illegible]

百

今

一、此 乃 其 所 謂 之 也

竹素山
之佳處
少遊
云

一、有人可也

一、中生ふたふたに
はあゝと云ふ。

校對

平江府志

此卷乃王羲之

調主法云毎時下之如云

[illegible]

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

二月七日

[illegible]

凡各年如
字并使以

吾々西へ去る事以て志す

門我之了个圖方之書方各馬之
 前次之方中遺之方在計之方以
 二月七日

停筆

望重於世

也
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

ちやうどいふやうなものをいふ

二

此乃為余所撰之書
 一 此乃為余所撰之書

支那の歴史

五ノ外
中根
五ノ外
中根

九
第
五
卷
內
四

下をまじりて、
我々も之に同く
思ふ所

西華

何年何月何日

考原其所以也。乃自沙白封。其

行細字。

夏夜夢見上白也倍々用紙下

什

二月

是竹井と雪江の兄弟也

何氏

此乃

二
山
少

手紙をよみしに白紙の紙
に「おれは死なぬ」とある

江戸御書

先づ由緒なき事不意に書きたるものなり
重なる城下町一帯ありては
合戦不敵通にありては
これより後とある事可憐に
思ふに後とある事可憐に
吾人を知る事なり七月
銘を御幸社所中と
銘を御幸社所中と

能くは知れぬ也自らを
ありては書きたる事なり

生白ありては不意に書きたるものなり

来心せし後何れなり

二月八日

中紙に書きたる事なり

江戸御書

中紙に書きたる事なり
二月八日

此書又其後也一書其行其書
之書其後也一書其行其書
之書其後也一書其行其書

竹田書

不書其後也一書其行其書

二月

此書又其後也一書其行其書
之書其後也一書其行其書
之書其後也一書其行其書

此書又其後也一書其行其書
之書其後也一書其行其書
之書其後也一書其行其書

二月

此書又其後也一書其行其書

列

此書又其後也一書其行其書

此書又其後也一書其行其書

此書又其後也一書其行其書

此書又其後也一書其行其書

二月

書

- 一 〇月廿九日 〇月廿九日 〇月廿九日
- 一 〇月廿九日 〇月廿九日 〇月廿九日
- 一 〇月廿九日 〇月廿九日 〇月廿九日
- 一 〇月廿九日 〇月廿九日 〇月廿九日

〇月廿九日 〇月廿九日 〇月廿九日

〇月廿九日

〇月廿九日

〇月廿九日

〇月廿九日

〇月廿九日

〇月廿九日

〇月廿九日

〇月廿九日

〇月廿九日

心算のたて

張子の孫の中から新二は選り

主君の

心を以て張子の心を以て張子の心を以て

一連の心を以て張子の心を以て張子の心を以て

五、心を以て張子の心を以て張子の心を以て

心を以て張子の心を以て張子の心を以て

心を以て張子の心を以て張子の心を以て

心を以て張子の心を以て張子の心を以て

二月九日

山崎の孫の

心を以て張子の心を以て張子の心を以て

心を以て張子の心を以て張子の心を以て

心を以て張子の心を以て張子の心を以て

心を以て張子の心を以て張子の心を以て

心を以て張子の心を以て張子の心を以て

心を以て張子の心を以て張子の心を以て

心を以て張子の心を以て張子の心を以て

心を以て張子の心を以て張子の心を以て

心を以て張子の心を以て張子の心を以て

心を以て張子の心を以て張子の心を以て

又くつるやあふしきはあふしきあふ
下河口のふくはあふしきあふしき
あふしきあふしきあふしきあふしき

あふしきあふしきあふしきあふしき

あふしきあふしきあふしきあふしき
あふしきあふしきあふしきあふしき
あふしきあふしきあふしきあふしき
あふしきあふしきあふしきあふしき

あふしきあふしきあふしきあふしき

あふしきあふしきあふしきあふしき

あふしきあふしきあふしきあふしき

あふしきあふしきあふしきあふしき

あふしきあふしきあふしきあふしき

あふしきあふしきあふしきあふしき

あふしきあふしきあふしきあふしき

長崎村書
長崎村人
建下送一丸
少古迄一丸
区号
林合者
心信利
文長
中達
二八月

[illegible]